

## Chim↑Pomメンバー、卯城竜太氏らが調査選考委員を務める『社会彫刻家基金』 「社会彫刻家」を紹介する書籍『へそ』を出版！記念イベントを開催 ～ これからの社会を考えるきっかけに～

2022年6月10日（金）、社会彫刻家基金は「kudan house」（東京都千代田区）にて、書籍『へそ』の発売にあわせて出版記念イベントを開催した。当日は、会話や飲み物を楽しみながら書籍『へそ』を手にとることができる「SS Lounge（社会彫刻家ラウンジ）」と、「社会彫刻家アワード2021」の受賞者によるトークセッションが行われた。

今回「社会彫刻家アワード2021」を受賞したのは、オルタナティブスペースコア、ボーダレスアートスペース HAP、マユンキキの三組。「社会彫刻家」とは、アートを触媒に社会に変化を創り出すアーティストのこと。書籍『へそ』は「社会彫刻家」という考え方とその実践を伝えるメディアとして、MOTION GALLERYのクラウドファンディングで出版資金を募り（<https://motion-gallery.net/projects/socialsculptor2021>）、2022年6月5日に発行された。「社会彫刻家アワード2021」の受賞者三組への取材や、調査選考委員である飯田志保子氏、Chim↑Pom from Smappa!Groupメンバーの卯城竜太氏、ヴィヴィアン佐藤氏の三名による選考プロセスなどを振り返った鼎談、関連するテーマへの論考などがまとめられている。<https://socialsculptor.tokyo/award2021>

トークセッションは、この受賞者三組を迎え、社会彫刻家基金運営事務局・林暁甫さんのファシリテーションで行われた。セッションの前半は、書籍『へそ』の取材後の活動や地域で「アート」に携わる人間ならではの苦労などをそれぞれが紹介。後半は受賞の舞台裏なども語られ、大いに盛り上がった。



左：イベントの様子  
右：書籍『へそ』の表紙

### 受賞者の活動

#### ボーダレスアートスペース HAP

ボーダレスアートスペース HAPは、福祉とアートがどこまで共存できるかということに挑んでいる。木村さんはそのきっかけについて説明。

「長年ギャラリーをやっていて、そこで展覧会をする若いアーティストの多くはアートだけでは生活していけない。アーティストが社会に対してなにかできるかと考えていたとき、いわゆる障害者と呼ばれる子どもたちがアーティストと共に過ごすことで伝えたいことが伝えやすくなるということを知った。アーティストにとっては生活の糧となり、子どもたちにもよい環境を作れると考えた」

職員はほぼ全員アーティストという福祉業界においてはかなりユニークな場で、「アートが療育として成り立つのか」ということを日々実験している。



ボーダレスアートスペース HAP  
代表（木村成代）

## オルタナティブスペースコア

スペースがあるのは、かつて映画『仁義なき戦い』の舞台にもなり、広島の中でもとくに濃い人間が集う商店街・基町ショッピングセンター。昔ながらの Snackbar や喫茶店、焼肉店などが立ち並びその中でアートをやっている。商店街の役員を頼まれて参加しているが、ときに地元の人と衝突することもあるという。

「商店街は社会の縮図。アートは、ここだけに限らず周りの人にはなかなか理解されにくい活動だと思う。日本中の地域に共通することだと思うが、少子高齢化が進む中、同時に国際化、多様化も起こっている。その中で拠点を構えてアートや音楽のイベントを実施している。まさにカオスな状態」

地域でアーティストが活動することでアートに対する理解が深まるのか。こちらもまたアートの実験中といえるのかもしれない。



オルタナティブスペースコア  
代表 (久保寛子、水野俊紀)

## マユンキキ

音楽分野だけでなく国内外のアートフェスティバルにパフォーマンス参加することが多くなったとのこと。」となっていますが、元々アートフェスへのパフォーマンス参加は行っていて、多くなった、ということではないので、「音楽分野だけでなく国内外のアートフェスティバルにパフォーマンス参加もしている。一般に興味や認知が広まる一方で、いまま差別などの問題は解消したわけではなく、昨今のアイヌを取り巻く環境は大変複雑になっている。

「『アイヌの代表』といわれることを避けている？」と林さんからの問いかけに「そこは気をつけている」といしつつ、逆に「あなたがアイヌだから選んだのではない」と過剰に気遣われるのも困るとその立場の難しさを語った。



マユンキキ

Photo by Hiroshi Ikeda

## 「社会彫刻家」という言葉の重み

「社会彫刻家アワード」は今回が第一回ということで、受賞者側からも「なぜ自分が選ばれたのか？」という戸惑いもあったことが語られた。そこで林さんより審査の過程の一部が披露された。「そもそものボイスの社会彫刻の概念をたどると“社会彫刻家というプロフェッショナル”をつくるようなことになってはダメではないかという議論もあった。それでも敢えてアートをひとつのキッカケとして行動をしようとしている人を選ぼうということになった」

「社会彫刻」とは、ドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイスが提唱した概念。芸術とは、絵画や彫刻、音楽などだけでなく教育活動、政治活動、環境保護活動、宗教なども含まれる、つまり意識的な人間の営みは芸術であるとして「すべての人間は芸術家である」と宣言し、今日のアーティストにも大きな影響を与えている。また選出されたけれど受賞を辞退した人もいたということが明かされ、それに対してオルタナティブスペースコアの久保さんは「社会彫刻家という言葉の重さでもあり、この賞の面白さ」と感想を述べた。調査選考委員による選出のプロセスの詳細は、書籍『へそ』まとめられている。

## 「誰に選ばれるか」が重要だった

当初、受賞辞退も考えたというマユンキキさんは、最終的に受賞を決めた。「選んでくれたのが飯田志保子さんだったということがある。飯田さんは自分が芸術祭に関わり始めた2015年くらいから知っていてくれて、そういうずっと見てくれていた人から『マユンは日本における社会彫刻家だといっていいと思う』と言われたことが大きい。自分でも社会を彫刻するとはどういうことか考えてみようと思った。全然知らない人に言われていたら受けていない」と語った。

## 「この三人で社会彫刻について考えられたら.....」今後のさらなる“波紋”のひろがりへ希望

今回、三組の受賞者中、二組の受賞者が奇しくも広島から選出されたことについて、ひとり北海道選出のマユンキキさんからセッション中に何度も「いいな、羨ましいな」という発言があった。実際、オルタナティブスペースコアの久保さんとボーダレスアートスペース HAPの代表である木村さんは以前から交流があったとのこと。

「木村さんは広島の有名人で若いアーティストをいつも助けてくれるお母さんのような存在。私自身も学生のときに助けてもらった」とオルタナティブスペースコアの久保さんから広島での木村さんの功績を紹介し、さらに「私たちをつなげてくれたのは、Chim↑Pom。Chim↑Pomが広島でプロジェクトを開催したときにつながった」と今回の選考委員でもある卯城さんとの縁も披露した。

実は、受賞者三名が一か所に揃うのはこのトークセッションが初めて。2021年7月14日に行われた「社会彫刻家アワード 2021」の授賞式に木村さんは参加できず、今回は満を持しての機会だった。「広島同士ならいろいろと交流あるのかな。（一人離れた北海道で）私は寂しいなと思っていた。受賞者同士が話して、その後なにかに具体的なものつながった方が基金にとってもいいはず。もっとこの三人の仲が良くなる機会を作ってもらわないと！」とマユンキキさんから社会彫刻基金運営事務局へ強いリクエストがあった。

林さんからは、今後も「社会彫刻家アワード」は続いて行く予定であることと、クラウドファンディングを通じて書籍『へそ』の制作資金の調達を支援した280名のコレクターたちと何かができるか、これから考えていきたいという考えが語られた。マユンキキさんから「私たちもそれに関わるの？」との問いに「関わってもらいますよ！」という林さんの答えに木村さん、久保さんも笑顔で頷いた。

トークセッションは終始和やか雰囲気ながらも、アーティスト同士の会話らしく率直なやりとりが交わされた。書籍『へそ』の編集コンセプトの「波紋」のように、社会彫刻という概念、アートを通じて社会に変化を創りだそうという試みが広がっていく希望が見えた濃い時間であった。書籍『へそ』は、全国の書店、Amazonにて購入することができる（取扱書店：<https://socialsculptor.tokyo/award2021>）。

### 書籍『へそ』

書籍タイトル：『へそ』

編者：社会彫刻家基金

発行日：2022年6月5日

定価：2,420円（本体2,200円）

寸法：w120 x h188mm／並製

頁数：表紙4P＋本文224P

発行部数：2,000部

編集・構成・文：桜井 祐（TISSUE Inc.）

ブックデザイン：大西 隆介、沼本 明希子（direction Q）

写真：池田 宏、丸尾 隆一

発行元：株式会社MOTION GALLERY

印刷：株式会社ファビオ

取扱書店：全国の書店、Amazon

詳細：<https://socialsculptor.tokyo/award2021>



書籍『へそ』



授賞式の様子

## 書籍『へそ』目次

はじめに

### 第一章 社会彫刻について知る

- ・そもそも社会彫刻って何？
- ・運営事務局が選ぶ本と映画

### 第二章 社会彫刻家について考える

- ・鼎談

必要性の中から生まれ出づるもの—アワードを通して結ばれてきた社会彫刻家の像とは？ 卯城竜太×ヴィヴィアン佐藤×飯田志保子

エッセイ

- ・クラウドファンディング。あるいは社会を彫刻するデジタルな手段—大高健志

### 第三章 マユンキキを巡る

- ・インタビュー 「私を通過して生まれるもの」マユンキキ
- ・対話 何かを選ぶために何かを捨てる。

二者択一の息苦しさを抱えないために 飯田志保子×マユンキキ

- ・声々 まわりが見た社会彫刻家、その波紋
- ・寄稿 彼女たちの私的な空間を他者と共有するという行為について—原 万希子

エッセイ

- ・本書タイトル『へそ』は、ひょんなことから生まれた—菊池宏子

### 第四章 Alternative Space COREを巡る

- ・インタビュー 「つくりたいのは土壌。文化は勝手にできていく」久保寛子+水野俊紀 (Alternative Space CORE)
- ・インタビュー 「『療育』っていう言葉がずっとしっくりこなかった」木村成代 (ボードレスアートスペースHAP)
- ・対話 アートだけで背負いきれないものと接続し、格闘する

卯城竜太×久保寛子 (Alternative Space CORE)

- ・声々 まわりが見た社会彫刻家、その波紋
- ・寄稿 オルタナティブ原論—オルタナティブ・スペースとは何か？—福住 廉

### 第五章 ボードレスアートスペースHAPを巡る

- ・インタビュー 「『療育』っていう言葉がずっとしっくりこなかった」木村成代 (ボードレスアートスペースHAP)
- ・対話 福祉でもアートでもない。無我夢中の先に生まれた生態系 卯城竜太×木村成代 (ボードレスアートスペースHAP)
- ・声々 まわりが見た社会彫刻家、その波紋
- ・寄稿 「ルーズプレイス」が必要なのだ—アサダワタル

エッセイ

- ・個人の生を超える。触媒として社会彫刻—ヴィヴィアン佐藤

最後に・謝辞

熱源紀行—写真=池田 宏 文=林 暁甫

## 社会彫刻家基金

社会彫刻家基金は、新型コロナウイルス拡散後の「新しい日常」において、アートに触媒に社会に変化を創り出すアーティストを支援する基金です。新型コロナウイルスにより、私たち一人ひとりが生活/仕事/移動/コミュニケーション/コミュニティなど、生きる上で不可欠なことを根本から見つめ直す必要に迫られています。誰も答えを知らない「新しい日常」におけるアートの役割は、従来の「アート」という言葉の定義に捉われることなく、闇夜の中で光る灯台のように私たちが進むべき方向性を指し示すものであってほしい。そこで、私たちはヨーゼフ・ボイスが提唱した「社会彫刻」の概念を現在の状況下で再解釈しながら実践していくことこそが大切だと考えました。本基金は、こうした問題意識を元にアーティストを支援し、国内外に発信していきます。今社会の形が転換する大きな岐路に立っている中で、アートが社会に出来ることを本基金で後押しし、「新しい日常」の姿や未来の形を皆様と一緒に現して行ければと考えています。



## 受賞者プロフィール

### オルタナティブスペースコア /Alternative Space CORE

オルタナティブスペースコアとは、2017年7月基町ショッピングセンター内にオープンした、文化活動のための多目的スペースです。現代アートをはじめ、音楽や文学、料理、ファッション、言論、科学など様々なジャンルの文化を発信、共有する事を目的としています。2020年より隔月でブロックパーティーを開催。<http://alternativespacecore.blogspot.com>

### ボーダレスアートスペース HAP / HIROSHIMA ART PLATFORM

ひとがアートと出会う場所「ギャラリーG」、子供がアートと過ごす場所として「ボーダレスアートスペースHAP」2つの目的「HIROSHIMA ART PLATFORM」(略してHAP)をつくりました。現代社会の様々な人々とのコミュニケーションを通して閉鎖的になりがちなアートの世界が社会と応答しやすくなるような場づくりに没頭しながら、国内外作家のアートプロジェクトサポートから地域の作家の展示サポート、地元アーティストと障害のある子供たちとの創作活動(放課後デイサービス)、子供たちの作品を社会にコミットさせるアートグッズ制作など幅広く活動しています。<http://artspace-hap.com>

### マユンキキ/Mayunkiki

1982年生まれ。北海道出身・在住。アイヌの伝統歌を歌う「マレウレウ」のメンバー。音楽分野だけでなく国内外のアートフェスティバルにパフォーマンス参加多数。アイヌ語講師、札幌国際芸術祭(SIAF)2017バンドメンバー(企画チーム)、SIAF 2020ではアイヌ文化コーディネーターをつとめる。2018年より、自身のルーツと美意識に纏わる興味・関心からアイヌの伝統的な文身「シヌイエ」の研究を開始。現代におけるアイヌの存在を、あくまで個人としての観点から探求し、表現している。2020年には、第22回シドニー・ビエンナーレ「NIRIN」に参加。同年、写真家の池田宏と「シヌイエアイヌ女性の入墨を巡るプロジェクト」(北海道・白老)、その後の初めの個展として2021年「シンリッ アイヌ女性のルーツを探る出発展」(北海道・札幌、CAI03)を開催した。<https://www.tonkori.com>

## 調査選考委員プロフィール

### 飯田 志保子

1998年の開館準備期から11年間東京オペラシティアートギャラリーに勤務。2009年から2011年までブリスベンのクイーンズランド州立美術館/現代美術館内の研究機関に客員キュレーターとして在籍。2014年から2018年まで東京藝術大学准教授。アジア地域の現代美術、共同企画、芸術文化制度と社会の関係に関心を持ち、ソウル、ニューデリー、ジャカルタ、豪州複数都市で共同企画を実践。



Photo by ToLoLo studio

### 卯城 竜太

Chim↑Pom from Smappa!Groupメンバー。Chim↑Pom from Smappa!Groupは、2005年に東京で結成されたアーティストコレクティブ。時代のリアルを追究し、現代社会に全力で介入したメッセージの強い作品を次々と発表。世界中の展覧会に参加するだけでなく、自らもさまざまなプロジェクトを展開する。



### ヴィヴィアン 佐藤

美術家、文筆家、非建築家、ドラッグクイーン、プロモーター。ジャンルを横断して独自の見解で分析。作品制作発表のみならず、「同時代性」をキーワードに映画や演劇、都市など独自の芸術論で批評展開。サンミュージック提携タレント。大正大学客員教授。



MOTION GALLERYは、みんなの共感をパワーに、社会に新しい体験・価値観をもたらす創造的なプロジェクトを実現するクラウドファンディング・プラットフォームです。<https://motion-gallery.net/> ▼Podcast <https://propo.fm/motiongallerycrossing>



一般のお問合せ： [contact@motion-gallery.net](mailto:contact@motion-gallery.net)

報道関係者の問合せ：株式会社MotionGallery PR 村上 Tel : 090-5074-2320 Email : [harukamurakami@mgly.jp](mailto:harukamurakami@mgly.jp)